

---

# 世界横暴美食漫遊記

羽鳥 玲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界横暴美食漫遊記

### 【Nコード】

N7194Q

### 【作者名】

羽鳥 玲

### 【あらすじ】

アイシヤは旅をしながらグルメルポを書く小説家。

旅先でふと思いついたように自分の従姉であるアリアに嫌がらせにシール王国に立ち寄ることに！

でも本業のグルメルポだって忘れない！

一石二鳥の美味しい旅行記をここにお届けします。

## （前書き）

バカが書きたくて……………。

いや、本物じゃなくてバカのふりしてる人が書きたくて。

旅行に行くのが昔から好きで

でも海外にずっと行ったことが無くて、最近海外デビューしました。

そしたらこういうバカノリの話を書いてしまった。

背景描写とか、私はもう少し勉強した方が良さそうですね。

穏やかな旅行日和の気候のある日、シール王国とメリウス皇国の国境に在る税関の事務局員達は困っていた。

適当：とは言わないが税関と言っても通るのは観光ビザの人間ばかり。楽勝：と言っては語弊があるが友好的な関係を長く続けていて国交の緩いメリウスのビザを持った人間にポンポン判子をついていれば良い。

だがいつもの観光客と彼らは違っていた。

パスポートによると、手前に立って微笑んでいる大人しそうな女性の方がアイシャローマン。後ろに控えている背の高い男性がリーダーウオンカーティス。

『身形の良い二人組』、というのが第一印象。若い男女だが貴族のような立ち居振る舞い。その反面、立派な旅の装いの割に従者が一人もいない。もしかしたら貴族の駆け落ちか？？と思わせる彼らの更なる問題は、その提示してきたパスポートにある。

それは数年前まで戦争状態に有り、未だに冷戦状態が解けない隣国・カリスト帝国のもの。更には国を挙げて身分を保障し、数多くの特権を持つ皇族<sup>ロイヤル</sup>パスと呼ばれる特例中の特例のパスポートだったから。

軽々しく通してしまつては国内外の有力貴族の圧力で戦争が起ころかもしれない。そもそもが国を挙げての客人となる可能性のある人間を判子一つで、「はいどうぞ。気をつけてね」と簡単に行かすわけにもいかず担当局員は右往左往。

結局その判断は一局員にも、そのトップである局長にも出来るものでは無かった。カリスト帝国大使館に連絡を取り、判断を仰ぐことになったのは必然。

客人は丁重に貴賓室にて持て成し、荷物の一切は一旦警備兵が預

かり…。

シール王国側の人間として見れば、彼らは戦を好む蛮族と卑しまれているカリストの人間だ。正直言って良い印象は持てない。だがさすが国賓クラスの貴族、とても言うべきなのか…とても大人しく、とても優雅に、一つも動揺せずに談笑しながら別室に移った。

手荷物を検査しても、二人共ちよっとお散歩にでも出掛けるかの如き軽装に近く、旅人必需の護身具すら持っておらず。

逆にどうやってこの国境まで辿り着いたのか詳しく道中を訊いてみたいくらいだ。メリウス皇国側も治安が良いと言ったって、観光客狙いのスリや強盗がゼロではない。その上、この人達は治安の悪いカリスト帝国出身。既に追剥ぎにあった可哀相な後なのかもしれないがいろいろツツコミ処のある…いや、異質であることは間違なかった。

身の回りも落ち着いたところで、取り調べよろしく局長は怖々と尋ねてみた。

「に、入国の目的は？」

「さいとし〜いんぐ！」

女性の方が待ってましたとばかりにニコニコと何やら期待のこもった視線を向けて応える。言っている意味が解らず局員総員しばらく固まっていると彼女は非常に落胆した様子で後ろに控えていた男性の方を振り返った。

「ねーえ、通じないよお？私のシール語間違ってる？」

「アイシャ、共通語で質問されたんだから普通に『観光です』って答えれば良いんじゃないですか？」

「現地の人が現地の言葉喋らないで文化の保護は出来ませんよ！世界中の至る国々で諺もあるように『郷に行っては郷に従え！』その国の言葉を嗜むのは観光客のマナーです！」

「現地人と原住民を勘違いされてるようですね。アナタが喋ったのはシール古語です。発音が違いますから」

「方言くらいの差です。多少の差異は現地人なら聞き分けられます

！多分！」

「その断言はどうかと思うけどね」

…と、総員棒立ちでそのおかしい掛け合いを見つめていた。何やら古い教科書とかで急遽シール王国を勉強してここまで来てしまった老夫婦のような印象を持ってしまったからだ。

今時の若者にしては随分と世界情勢に疎い…。

世界的に言語は統一傾向に有り、百年程前から現地語は廃止され、世界中が統一言語を話す。そんな事は一般常識だ。

特にお貴族様なら尚の事、世界情勢の教育を受けているだろうに…。

そこに立っていた全員が怪しいと感じ、総員一致で二人の拘留が決まったのだった。

\*\*\*

知らない土地の事は知ってる人と呼び付けて案内をさせるのが一番の良策だ

人はそれをパシリと呼ぶ。byアイシャローマン

「おねいちゃああん、会いたかったあ！」

体当たりよろしく小さな身体に抱き付くと税関事務局員はあからさまに安心した表情を浮かべた。厄介者の保護者が現れたのだから当然か。

この窓一つ無い分かり易く軟禁用の小箱のような部屋に入って来たのは予想通り、というか狙い通りの小柄で愛らしい容姿を持つ質の良いドレス姿の娘だ。

自分がカリスト城に移り住んで来たばかりの頃、従姉として紹介された十も年上の女性。そんな彼女はまだ五歳になったばかりの自分に以降の人生に於いて二人の関係を決定付ける暴言を吐いた。

『売女の娘』

育ての親の身分は未だに最下層の市民。没落貴族と言えどリーデルの方がずっと身分が高い。それでもカリスト城で自分が恵まれた教育と生活を保証されて来たのは、とある高貴な血脈の忘れ形見だ

から：というのは彼の城では公然の秘密。その後、無理矢理押しつけられるように与えられた爵位と領土のおかげでどれだけ社交界で苦勞してきたか、なんて言うのはまた別の話。

年端のいかない子供であっても投げ掛けられた言葉の中に浸みた憎悪と言うものは伝わるものだ。以来十年余りの間彼女、アリアⅡカリストⅡヴオグナーの邪魔をし続けるのが自分のライフスタイルの一環です。

まあ十年も経っちゃうとそんな風に相当大人げない台詞を自分に吐いてくれちゃった彼女も立派な大人になっちゃってて、悪いと思ってるのか何か知らないが自分のやることなすことすべてを受け止める大きな器に成長してくれた。様々な出世の妨害工作もしてきたつもりだったが今はシール王国に赴任するカリスト帝国最高位の外交官、更には軍事国家であるカリスト帝国最高位の軍人様にまで出世。

海軍の士官候補生になった時は海上までお祝いに駆け付け不慮の事故のフリして海に突き落とし、通り掛かった国境で戦線を敷いてると聞けば陣中見舞いがたら戦争のもたらす不幸を軍曹以下に説いて士気を下げ、：ありとあらゆる場所にお邪魔してきた自分としては外交官に就任したお祝いもやっぱりしなければなりません！

と：ついさっき、ふと思いついたので遅ればせながらではあるがメリウス皇国から進路を変えてわざとらしい芝居をしながらシール王国に入ったのだ。

狙いはバッチリ当たった様で、こんな解りやすい怪しさを演じた甲斐があったというものだ。直接会いに行くより余程会いやすい。（：というか自分達が直接会いに行くと彼女はきつと居留守を使うきつとそのまま雲隠れされる。）

だがこんな愛らしい外見をした彼女も本来はシールの敵国の軍人さんだし、ついでにこんな成りでも三十路だ。世の中の粹も甘いも味わって来ていて、税関局員がそんな簡単に信用して良い人間ではない気がする。若干、幸せボケというべきかここの税関局員はおっ

とりしているというか：ぶっちゃけザルだし。メリウス皇国経由ならなんでも持ち込めてしまうことを内心呆れてしまった。

根拠はコレ。自分達は護身具を身に着けっ放しでここまで来た。剣が仕込まれている杖をトンと床に付いたリーデルを見て小さく嗤った。

アリアもチラッとその護身具を目に入れると顔をしかめた。ついでに自分と目が合うと親の敵ぐらいの悪意を込めて睨まれたし：この人も分かりやすく嫌ってくれてるからからかい甲斐がある。

「アリアさんのお知り合いでしたか？」

「こんな下品な知り合いは居りません！」

アリアは酷く侮辱されたような表情でそう言った。

そう来るなら目には目を！行為には好意を！悪意には悪意を！がモットーです。可哀相な女の子を装ってシナを作るとすがりつくように涙ぐんでみたり。

「酷い：こんな知らない土地で唯一頼れる身内なのに：」

「アイシャ、ふざけてないで行きますよ」

「あれ？もう入国オツケー？？サッスガだね！」

涙はもったいないからすぐに引っ込めて警備兵から荷物をひったくるように取り返す。アリアはそんな自分をジッと見つめるとリーデルに向かって憐れみの言葉を掛ける。

「お守りが大変ね」

「まあ、ウチは基本放置なんです。厄介ごとに首を突っ込む癖がなければ側付きなんて楽な仕事です」

「リーデルⅡウォンⅡカリクティス、いつでもカリスト軍に欲しいぐらいなのにこんな小娘のお目付け役なんて：」

「俺は貴族なので軍人はごめんです。血なまぐさくて品が無さ過ぎる」

「私も一応貴族よ」

「はい。だからウォグナー公爵家には血生臭くて下品が移りそうだから近寄りたくありません」



「へー…ふーん…」

快活に笑いながらリーデルは言った。明らかに実家を馬鹿にされたアリアは顔を引きつらせた。だがそのまま反論はせずに関所を抜けていく。その後ろ姿はまだリーの言葉の刃のダメージが抜けきっていないようだ。

意地の悪い相棒に苦笑しつつ、アリアの後を追った。突っ掛かったのは自分達をまとめて下品と言った仕返しだろうからアリアの自業自得だ。リーはそこらのお貴族様にはとはレベルの違う高いプライドの持ち主なんだから。

カリスト皇家の印が入ってるパスポートにスタンプを貰うと役人にはわざとらしいくらい愛想良く優雅にお礼を言う。リーデルも同じように一つ上の目線で礼を述べた。アリアはそれを見て思いつきり嫌な顔をした。

「あなた達、一般の身分証も持ってるでしょ？それは陛下が非常時のために発布して下さったものよ。あまり王家の紋所をひけらかしての旅は物騒だしカリスト皇家の外聞の良いものではないわ」

「メリウス皇国でもこちらのパスポートで旅をしていたら私達は従者を引き連れて輿に乗って入国するところですよ。アリちゃんがいるって聞いたので呼び出すために使っただけです」

「俺はこっちの皇族パスで旅したいですけどアイシャが嫌がるんです」

「リーは『お忍び貴族』って肩書きも好きだから大丈夫！一般市民の振りしながら旅をするって設定に萌えるらしいし」

アリアが啞然とするのを感じながらも『お忍び貴族』を続けるために普通の旅券証を出してそちらにもスタンプを貰った。

旅券証に記載された名前はアイシャⅡローマン。…と言うより、世間的にはペンネームのノアールⅡロマンのが有名か。

付き人リーデルと一緒に世界中を旅して回り初めて三年目。

立ち寄る様々な国で出版したグルメ旅行記は世界中で大ヒットしている。

詳しくはノアールⅡロマン作、『世界を丸ごと喰い尽くす!!』  
『the大食道楽』を読んで!

因みに軽装なのは旅の上手な証拠です。かなり身軽に旅をしているが、多分そのやり方は一般の旅人に理解出来ない。本が売れるからそのお金で次の国へ移動。カリスト帝国の皇族出身なのを良い事に無理矢理世界中を強行突破。恵まれた才能と突出した権威が無いと出来ない旅の仕方であいま十五か国目突入、砂漠と澄んだ水の湧くオアシスの国シール王国まで辿り着いた。

正直九割アリアを冷やかしに來ただけだったが：この国は絶対当たりだ。水の美味いトコには美味しい酒がある（に違いない）! 肥えた人の多い土地は料理が美味い（に違いない）! と、言うわけで：

「アリちゃん、お腹あゝ減ったあゝ! ご飯んゝ食べたあゝいいゝ」  
「そこら辺の砂でも喰え!」

甘えた声も全く通用せず。冷たく放たれた言葉に周りの人間が固まった。彼女の愛らしい外見に似つかわしくない冷たさのせいだ。作った笑みは虚空に消える。ため息をわざとらしくついて独り言の様に言う。

「アリちゃんの奢りで食べないと心残りで次の国には行く決心が付かないなあ：せっかく再会した肉親だしなあ：アリちゃんの機嫌が治るまでしばらくは大使館にお邪魔しようかなあ?」

「飯喰わせたら直ぐに消えてっ! ホント消えてっ! 二度と現れないでっ!」

「わあい! アリちゃん大好き!」

「私はアイシャが嫌い」

「大丈夫。社交辞令。私と両思いだわ」

ニッコニコしながら二人共視線を逸らさずに笑顔で睨み合った。嫌いの両思いなんて不毛な言い争い。

リーデルがため息交じりでアリアの前に立った。

「アイシャは知り合いに会えたのが嬉しくてはしゃいでるだけなん

ですよ。二人とも高貴な家柄なんですから優雅にお願いします」

リーデルは穏やかに諭す様に諫めた。

メンドクサイ事はこちらもご免被るので一つ大人になって視線を逸らして差し上げる。

「美味しいお店に連れてってクダサイネ！オネエサマ。」

ニパツと明るく言うところとアリアが怯んだような表情を浮かべた。

この従姉が押しに弱いのは熟知している。

今までも押し掛けてはゴチらせて、押し掛けては面倒を押し付けてきた。今回もこのまま押し進んで、あわよくばシール宮廷料理を奢りで食べ尽くす！

アリアさん、ゴチになります！！

二人は心の中でアリアの持てる限りの贅沢を貪ることを決意した。

\*\*\*

関所を抜けるとアリアが飛ばして来た馬車に押し込まれた。

少し狭い馬車内では軽装の自分達が入ると身動きが取れない。アリアの高級そうなレースをふんだんに使ったドレスの裾を邪魔そうにしていると、リーデルが空気を読んだように馭者台にうつった。

二人きりの車内で居心地悪そうにモジモジ始めたのは年上のアリアの方で、自分はそんなアリアには全く遠慮せず車窓の景色を楽しんだ。

旅行の楽しみと言ったら第一に食事、というのは著書を見れば題名だけでも分かって頂けると思う。だがそれだけではないのが旅だ。

土地特有の景色、人、動物、香り、風。馬車に乗ってしまえば味わえるものは半減してしまう。だから自分達だけの旅ならこういう貴族然とした立派な馬車に乗る事はあんまりしない。

だから他の旅人と触れ合わないこの車内でのただ一つの楽しみに没頭することにした。

広がる車窓の景色にはこの国を味わうスパイスがある。本来なら自分の足で見て歩いていきたいとこだが、この国での最優先事項はアリアへの嫌がらせだから仕方ない。

シールの街並みは城と揃いの碧の壁を貴重とした美しい立ち並びが印象的だった。砂漠の黄金色と相俟って素晴らしい景觀。そしてこの地特有の気候、主に砂嵐等の悪条件に強い色調は文化財としての重要さを示している。城下町は城を中心にメインストリートが形成されており城の向こう側には神々が棲まう地として讃えられている魔峰が大きい裾を広げている。それはここから遠い海を町並みで表しているかのような光景だった。

鼻に付く独特の香りは地面に咲き誇る赤い花のもの。未知の文化がここには存在しているのだと思うと、世界の雄大さに涙が出そうだった。

感傷に浸ってると言われたらそれまでだが、浮き草のように流れて行く旅人生活を続けるにはこのくらいの楽しみは必要不可欠。旅を共にするリーデルも同じようで、前側の小窓を見つめていたら目が合ってお互い苦笑した。感性が合うのは長く付き合う上で重要なのだ。だって自分達は縛られない旅人なのだから目的地が違えばきつと一緒にには過ごさない。

少なくとも、自分自身がリーデルに併せて行動するつもりは全く無かったから。

坂も半分以上登ると段々目的地であろう建物が見えて来た。建築法が違うとかそんなもの以前の話でカリスト帝国の建物だと分かる建物が見えて来たからだ。あれがきつとカリスト大使館だろう。シンプルな敵愾心というか、軍事帝国カリストらしい要塞染みた装備が見え隠れしているし、急に攻められたりしないように正面一階に入り口が一つきり。街の壁たちとの配色すら併せていないのはどちらの意向か分からないが…。

（景觀乱してるし…）

砲台を覗かせる小窓が良いセンスしてる。だから嫌いなんだ。

このカリスト帝国の軍事主義が。情緒とかそういうものを全て投げやった統治体制が。

情緒や感傷でお腹は満たされない。頭では分かっているてもあの殺

戮を好む皇帝への嫌悪感は募る一方だ。

だから現皇帝派のエリアと仲が悪いのは必然とも言える。当の本人をチラッと見やると到着したのを良い事に逃げるように馬車を出た。

エリアはそのままパタパタと中に入って行く。自分達は荷物を降ろして後から続いた。

この要塞造りはともかく、壁面の配色に違和感というよりはあからさまな悪意を感じてリーデルにコソツと尋ねた。

「敵国の建物に紛れた方が普通は襲われにくいわよね？」

「アイシャ、多分建築した当時は碧い壁だったんですよ。この煤色は劣化です。シールの建築技術と違う材質を選んだからこんなになったんですね。討ち入り易い状況をまんまとつくられて…未だにいつ開戦してもおかしくない情勢のようです」

「やあーっぱり、そーなんだあ」

正直知った事ではない…が。

この旅がカリスト帝国の威光を戴いてのもののなので敗戦国となってしまうばそれなりに影響はある。今は『天下のカリスト帝国の皇室パス』で入っちゃ行けない場所までショートカット出来るし、身分はかなり強く保証してくれるため海外で拘束されるということはず無い。

そう言った意味ではエリアにはこれからも（ムカつくけど）頑張って貰わなければならない。

でも邪魔はする。これは趣味だから。そしてそのぐらいで敗戦するような人間ならとくに負けていて良いはずだ。

建物に入ると内側は華美ではない程度の気を配った趣味の良い調度品が出迎える。多くは古代カリスト王朝時代の物で大使館らしく飾られていた。エリアの趣味ではないことが一目瞭然。外観がアレだから中身もちょっと軍事施設を期待していたのに正直拍子抜けする。でも内装を手配した人間がきつとほかにいるのだろう。エリアが手配すれば、この走りにくそうなふかふかな絨毯や燃えやすそう

な素材のカーテンは外されている。

きつとその内装を選んだであろう人物が奥から優雅な歩行で歩いて来た。文官タイプの華奢な体作りをした男性にアリアは何やら必死に頼み事をしているようだった。

中肉中背、物腰柔らかで仕草のきれいなその人は片目は恐らく精巧に造られた義眼。今まで、戦場では見た事が無い顔。不覚にもその隻眼の貴公子に目を奪われてしまう。

過去、アリアの側近にはゴツい軍人や、ゴツい將軍やら、見た目は良くてもやたらサドっ気の強い將軍やら：お世辞にも柄が良いものでは無かった。当人の趣味は置いておいて、軍という所はそう言うものだから仕方なし。

だが：この男性はそれらと違う人種だと言う事は一目瞭然。

隻眼という事を除けば社交界の華になれる人種。流石に外交官に選ぶ適性を見分けて選ばれていると言うべきか：

目が合ったので微笑んで愛想よく挨拶を口にした。

「初めまして。アイシャールローマンです」

「ローマン？？」

一瞬、男性は目を見開いた。やっぱり頭の良い人。カリスト王が自分のお気に入りのアリアを裸一貫でこんな帝都と離れた場所に赴任させる訳はない。

「初めまして、シゼル＝セーブルです。ウオグナー大使の副官を勤めております。滞在中困った事がありましたら私にお申付け下さい」  
優雅な仕草で彼はそれを口にした。すでに先程覚えた疑問をしつかりと隠しているようだった。『ローマン』：というファミリーネームはカリストの中では良い意味を持たないから。

自分の姓が『罪の家』という意味合いを持つと知ったのは宮殿で教育を受け始めてからだだった。そんな名を持つ貴族はカリスト広しと言えど一人きり。素姓もしっかりと知れ渡ったところでこの人はきつとそれで態度を変えたりはしなさそうだし別に困らない。

対応に満足を覚えて愛想笑いでなく微笑んだ。客人への執拗な詮

索は貴族としては醜いものとして嫌われる。詮索の『せ』の字も出さない優雅さは本当に素晴らしいものだ。

「セーブル男爵」

「失礼ですがお会いした事がありましたか？」

「ええ。城にいた頃に貴族の方々にはだいたい顔と名前を伺いました。セーブル男爵ともお見掛けした程度でしたが一度だけ」

爵位、名前、領土、資産、交友関係：社交界で必要な事は全て叩き込まれてきた。最も、ここ数年カリストには戻っていない訳だから古い情報だが。

「シゼル、と呼んで下さい。私もアイシヤ様とお呼びしてもよろしいですか？」

「アイシヤと呼び付けて下さい。私の方が年下です。城じゃないしカリストじゃないんで堅苦しいのは抜きにしますね。シゼルさんアリちゃんから私たちのことを聞きましたか？」

「伺いました。滞在中はお二人を持て成すように申し付けられましたので」

「それには及びません。有り難いんですけど私は人見知りなんでアリちゃんにぜひ！」

人見知りの件でリーデルがプツと吹き出した。ええ、人見知りなんてしませんけど何か？

そんな分かりきったハツタリにもシゼルは態度を崩さずに微笑で応えた。

「大使は多忙な方ですのでお時間取りにくいと思いますが」

「問題ありません。私達は時間が自由になる旅行者です。アリちゃんの休みまで待てます。身内の観光に部下を巻き込むなんてそんな恥ずかしい事をアリちゃんにさせられません」

シゼルはチラッと横目でアリアを見やって「だそうですよ」、と小さく口にした。

アリアはワナワナ震えながら顔を真っ青にしたり真っ赤にしたり。相変わらず見てて飽きない従姉に駄目押しで嘲笑を送る。

「私が持て成せば良いんでしょ！今日よ！今よ！即効よ！そこで腹空かせて待ってなさい！！覚えてろ！食べ切れないなんて言わせないんだから」

と、アリアはヘッドドレスを脱ぎ、地面に投げ捨てて奥に入って行った。それを黙って拾いあげて回収する有能な副官を心底尊敬してしまった。あんな気分屋な上司、真っ平御免だ。

でも取り敢えずはアリアをからかう事とシール王国グルメツアーを一气にこなす事ができることになり、リーデルに勝利のスマイルと小さなガッツポーズを贈った。

\*\*\*

『待ってろ！』という言葉をそのまま鵜呑みにして待つ事小一時間。

自分達はアリアの身仕度が出来次第シールでもトップクラスのレストランに強権

発動で予約して食事、アリアの財政が厳しくなるくらい食べ尽くすつもりで待っていた。

だがリーデルも、シゼルも予想外の姿でアリアは再び現れた。

アリアは軍服を着崩し、サバイバルナイフらしき短刀を一本腰に差し鼻息荒く「行くわよっ！」とこちらに呼び掛ける。

いったい何処にっ！？？

と自分達は頭の中に同じ疑問を浮かべたはずだ。

高級なレストランでは明らかにドレスコードに外れてしまうその姿。いやいや：もしかしたら貸し切りならどんなボロを着込んでも赦されるのかもしれないが：。一番早く放心から復活して尋ねたのはシゼルだった。白い目を向けて「何処にですか？レディ」と厭味を織り交ぜて聞き返した。

「食材調達に決まってるでしょ？シゼル、シール政府からの報告を聞いているでしょ？」

「…それはもしかしてシールカークのことですか？」



聞き捨てならない名前が出てきてリーデルと共に眉をピクリと動かしだした。

シールカーク：食用肉の頂点と言っても過言では無いその名前は世界中に知れ渡り、グルメ界ではシールカークを食せずに物は語れないとまで謳われた高級食用家畜。自分達は出版社からの接待で一度干し肉を味わったが、本来堅いはずの干し肉がほどこけるように口の中で溶けていくのは初めてだった。因みにそこらへんのお肉屋さんでも『シール国産カーク』とか『メリウス産シールカーク』とかパチ物は結構出回っている。

だがシールカークはそこらへんのブランドカークとは手間・暇・味全てにおいて段違いなのだ。

シール王国の広大な砂漠に点在する牧場で飼われており、その餌や水にすら気を使って飼育されている。ストレスを与えると早死にしてしまう傾向があるらしく繁殖方法はシール内でもなかなか知る事が出来ない。ここまでの説明でお気づきだろうか？つまりは野生種では無い。

だからこそ何でアリアは狩りに行く姿勢なのかが理解出来なかった。まあ材料調達からしてくれるって言うなら食し方はこれしかあるまい。

「アリちゃん、新鮮なシールカークは生でもイケるって聞いたんだ！」

「ナ〜マ〜？アンタ頭おかしいんじゃないの？」

すっげー嫌そうにアリアが言った。今のセリフ、シール国民が聞いたら激怒するぞ。牧場では生で食べるのが粹だって話だし、宮廷料理に出て来るものは鮮度を最高クラスに保ち、最高クラスの職人が包丁を入れるのがスタンダードだ。…って言っても考えの違う者には伝わらないだろう。自分が高名なグルメルポライターでも現時点ではアリアを説得出来るほどの要素が無い。

だって生カークを食べるのは始めてだもん。美味しかったらアリアも食べたいと思えるくらいの文章を書けば良いんだ。

「私、頭おかしくて良いから生で食べたい。活きの良いのを狩って来てね」

ニコニコしながらリーデルも頷いた。

因みにこのリーデルはお貴族様の高いプライドと素晴らしくわがままで利己的な思考の持ち主だ。生は下品だとかアリアが言おうものなら自分が我慢したことを全てぶちまけてしまうだろう。

「生なんて野蛮な」

あーあ、言っちゃった。

思った通りにリーデルは笑顔のまま前に出るとまくし立てるように自分の考えを立て並べた。

「グルメと言う物は探求心が切り開いた物です。野蛮とかそういう括りは適切ではありませんね。先人が拓いた物を我々が発展させる、その為にはまず習うより慣れろ、聞くだけじゃなく体験が物を言うんです。あなたは野蛮と言いますが、動物を殺して、半生に焼いてステーキにして食してるのは何処の種族ですか？私達カリストの民では無いのですか？それこそむごい。あなたはシールカークの活作りを見た事無いんですか？シールの歴史や文化をもっと勉強した方が良い。あれは野蛮では無く、繊細な技術の織り成す包丁の技です。いい加減な知識で物を言う事こそ野蛮だ！」

…と、まあこんなめんどくさい人なんだわ。

お陰様で自分の役目は放心気味のアリアにちょっと強めの口調で念を押すだけだ。

「アリちゃん、生で！」

アリアは深く頷いた。余程の驚いたのだろう。素直な返事がそれを物語っている。自分は後ろ姿しか見てないがきつと目も釣り上げてたに違いない。まだ言い足りないとかばかりに鼻息荒く更に一歩前へ出て口を開き掛けたリーデルを後ろから抑え込んで「生で良いってさ」と耳元に囁いた。

何とも無かったように悠然と微笑んで、「ですよ？」と言う相棒に少し畏怖を感じた。

さて、少しどころではない畏怖を感じてしまったオネーサンをついて続きを急いだ。

「シールカークは、今年のはほとんど育ててないの」

「…なんで？」

「三年前に先王が崩御した時に子カークがご進物に使われたついでにう噂だけ…」

アリアが助けを求めるようにシゼルを見上げた。有能な副官は視線を受け止めて説明を継ぐ。

「カークは三年で育つため、ちょうどご進物として使われたカークが食べ頃のはずだった今年は絶対数が少ないのです。それでもシールカークは観光地・シール王国としての財源ですから観光客向けの数確保してあったはずなんです…」

一瞬彼の目が泳いだ。咳払いをしてからまた淡々と続ける。

「今年の唯一の牧場が全シールカークに逃げられました。既にシールに点在する各国大使館には詫び状とカークの為に毎年払っている税金が賠償金込みで返金されております」

「つまり…もしも数頭残されていても他国には回って来ないってこと？」

「そうですね。それが嘘であってもお金と誠意は示されてますから」  
強ちそうとは言い切れまい。先人の指導者の中には自分の好きな香辛料一つ、酒一樽を巡って戦争を起こした者もいた。今のカリスト王がそうではないとは限らない。今の王には「シールカークが今すぐ食べたいからシールと戦争するぞ」とかどーでも良い大義名文を作っておいて実は他の目的があるような腹黒王で、その王へ全幅の信頼と忠誠を誓い、それを成し遂げうる部下がいる。他国としては恐ろしいことこの上ないだろう。

「だから…本当に逃げたとしたら野生化したカークが砂漠には増えてるし、そもそも極少数ではあるけど野生種も居るって話しよ」

そこでアリアの握るナイフに繋がるらしい。

シールカークって本来は砂漠移動の為に人が跨がっていたらしい

から結構な体格あると思うけどこの人は本当に戦のプロなのでそこらへんはお任せします。

「そんなに大変なら他の料理からでも良かったのに……」

とポツリと呟いた。アリアはかなり青褪めて「順番の問題!？」って非難した。

ええ、シール王国に来てシールカークを食さないで次の国へ渡航したら編集部のお笑い者になりますから! 来年までアリアに嚙り付いても滞在する覚悟できてますよ。

「分かった! アリちゃんがカークを食べさせてくれたら他の物は自分たちで食べてまわる。逆にアリちゃんがカークを食べさせてくれるまではここに居るし」

「絶対仕留めてみせるわ! だから早く、すぐに、一刻でも早く次の国に行って下さい!」

狩人当人の力の入ったところでそろそろ行ってみようか。

「そんなわけで: 牧場まで移動します。生で食べるなら一緒に行かないきゃダメなんじゃない??」

「もちろん行くよ! 砂漠で民俗衣装を着てカークに乗るんだもん!」

因みにこれはもちろん食用種ではない。シゼルがこれを聞いて苦笑混じりに「手配させます」とアリアに言った。

\*\*\*

乾いた暑い風が顔の前を通り過ぎて行った。

じりじりと照り付ける太陽とさらさらと流れる砂。周囲は見渡す限りいっぱい広がる砂海。

そんな中に4人で儀式用の装飾を施したカークに豪華な鞍を装着して跨がっていた。ついでにリーデルと自分の装いもシゼルが用意してくれた民俗衣装だ。

薄い艶やかな白絹に美しい染めをした一枚布。それを独特の巻方で身体に巻いただけ。身体のラインが全て出るのでカリストの人間が見たら嫌な顔をするのだろう。アリアは動きやすければなんでも的な前衛的評価をしていたがカリスト貴族社会では有り得ない。実際

リーデルとシゼルは拒否反応を示していた。

シゼルは最後まで拒否したがリーデルは二回目の誘いには着てしまうところが今までもこれから相棒たる所以だ。好奇心が彼の中のお貴族の仕来たりを歪めていくのだろう。

なので結局二人でポーjing。コンセプトは異国の姫と剣士（剣を持ってないが）。

リーデルの衣装は男性物なので同じ絹の衣装でも巻方が違う。長さは男性物のが長かったかな？緩めに巻かれたそれは裾の刺繍までの柄を意識した巻方だ。ただそれだけで違う印象を与えることに感銘を受ける。上から下までなめるように見ていたらリーデルがフツと微笑んだ。「どーだ！俺様はなんでも着こなせるんだぜ」って聞こえてきそう。でも所作も体形も整っていて、剣士と言うより宮廷騎士のが合ってるのかな。

女性、男性、どちらも織りの美しさを引立たせる巻方。文化の違いなんてとても小さな事。築いた歴史には何人も冒す事の出来ない機能美が在る。

「暑くないの？」

軍服を着崩して身体を手で扇ぐアリアは怠そうに言った。

「思ったよりも暑くないよ。布を重ねてるから暑いかと思ったのにちゃんと冷やせる所は冷やして守らなきゃいけないところには布があるし…あとなんか衣装を着ける前に塗り込まれたオイルが…」

汗止めみたいな役割なのか、ベタベタしたりしない。

香りは独特のものだが臭いとは感じない甘い香り。

リーデルがクンと鼻を近付けて嗅ぐ。

「俺のとは違うね」

自分もリーデルの首元に顔を近付けて嗅いだ。

男性物のオイルはナツツのような香ばしい甘さが薫る。

「私こっちの香りのが良いなあ」

二人で顔を近付け合っているとアリアが顔を引きつらせた。

「アンタ達、イチャイチャするなら二人だけの時にしてくれない？」

「イチャイチャ?? 別にしてないけど」

「メツチャしてるから! 見てるとメツチャ暑苦しいから!」

「なんでも色恋に結び付けるのは高貴な方のすることではありません。お気をつけあそばせ」

「減らず口…」

アリアはそう言いながら口を真一文字にしてカークの腹を軽く蹴った。

先行して歩くシゼルにおいつくとそのまま二人は足早に先に進んでいく。

そうは言っても見渡す限りの砂山。こんな場所にある牧場ってどんなものなんだか…?

想像しがたくってリーデルと顔を見合わせては首を捻る。

それからかなり進んだだろうか? 水を飲みながらもお貴族様なシゼルなんかは少し息が上がっている。軍人じゃないただの分官職なら体力がある方だろう。

自分達は旅人だからある程度のきつい行程はヘツチャラだ。それにこの民族衣装は結構な助けになっている。

見掛けはすぐ音を上げそうなお嬢様のアリアは全く疲労の色を見せずにシゼルに気を配りながら進む。本当に軍人だった事を否が応にも実感させられた。

そうこうしているうちにアリアは溜め息を吐き、天を仰ぎながら汗を拭いて呟いた。

「うん! 迷ったわ!」

「はあ?」

有り得ないんですけど!

感心したばかりなのにいきなりのギブアップに厭味も引っ込んで弁明を待った。全員の同じ気持ちのこもった視線を浴びても悪びれる様子もないこの従姉は相当なものだと感じさせられた。

「だって状況を総員で確認することは大切なことでしょ? 来た方はまだ分かる。水も今ちょうど半分だから引き換えしましょう」

「あのさ、誰もがアリちゃんほどの体力があると思ってるんじゃないでしょうね？」

「だから戻るって言ってるんじゃない！私一人ならっ！」  
「もう遅い！」

と、自分が怒鳴った瞬間にカークの上からシゼルの身体が揺らいだ。咄嗟に手を伸ばして身体を受け止める。人は水分だけ取っていれば良いわけじゃないんだ。旅慣れてないシゼルには熱、日差しも苦になる。

身体は自分達よりも熱くて、熱が随分あるように思えた。肌から汗が乾いているのもまずい。

きっとこの人は我慢強いのだろう。だが旅をする上では自分の状況をちゃんと正確に周囲に伝えることだって大切なことだ。

リーデルに支えられてカークの上からゆっくり降ろした。砂の上はジリジリと熱されて熱い。

「軍隊上がりなんだから応急処置くらいはできますよね？」

リーデルの首に巻いていた長い布をひっぺがすように外すと砂の上に引いた。荷物を枕替りに頭を上げる。更に自分の首の布を影になるようにシゼルの上に広げた。

先程の問い掛けにも答えずに右往左往しているアリアを引っ張ってシゼルの前に座らせる。カリスト軍なら応急治癒魔法とか習ってはいらるだろうから一時的な体力の底上げをして先に進むしか無いだろう。

「アリちゃんが軍隊卒で良かった」

「いや：あの」

「アリちゃん、早く！」

「私、治癒術は落第だったの。全然できない」

一瞬殺意すら吹っ飛んで、憐れみすら感じた。こいつマジで使えない！

「リーデル！水と塩！」

「はい」

渡された水筒に塩を直接流し込むと水筒の口をシゼルに向けた。

反応が無いので自分で含んで口移しで飲ませる。横からパタパタとリーデルが仰ぎ始めた。

いちいち良い反応を返すアリアに苛立ちながらもリーデルと黙々と処置を続けた。

応急処置っていう意味を分かっている。この人の命は処置に一刻を争うのに。

息が詰まるような音が聞こえたので横に向けて口の中の物を吐かせた。

正直言つて、アリアが処置に手を貸さない理由も分かっていた。ここで水を彼に分け与える事は自分の命を与えている事に等しい。懸命なのはシゼルの捨てて街に戻り、助けを呼んで来る事。

嫌な気持ち湧き上がって来る。こういう部分が人の上に立つのに必要な部分なのだろう。リーデルも眉を顰めながらそれについては触れなかった。それでも一緒にその命になる水を分け与えてくれているリーデルにいつも感謝してしまう。

「アイシャ、水を…」

「うん」

こまめに水を唇に持っていく。しばらくそれが続いて意識を取り戻したシゼルが咳き込んだ。

「すみ…ま…」

「まだ喋らない」

声の出きらない彼にピシャリと言い放つとリーデルから布を受け取り、シゼルの頭を覆った。

水、残り少ない。ここで死ぬのかな？それもまた良いだろう。人は海で生まれ、乾いて死ぬ。

だがその最期の一秒まで、一滴まで足掻いたって良いはずだ。

「進みます。もう戻れない」

シゼルの身体をリーデルに渡す。

アリアはそれをジッと見つめて「ふーん、身体を冷やせば良いの



か…」と呟く。

「出来るの？」

「冷氣魔法はあまり得意じゃない。でもそれくらいは出来る」

「首冷やして！」

アリアが頷いた。

瞬時に詠唱呪文も無くアリアの右手のあたりの温度が下がった。

青白い光を帯びた手はゆっくりとシゼルの首を撫でる。

すぐに呼吸が楽になって身体の熱が引いていつているのが分かった。

魔法ってこういう使い方があったんだ。こんな使い方が高度な魔法だって分かってる。

リーデルが一度シゼルの首に触れて柔らかく微笑んだ。

「アイシャ、大丈夫。人はそんなに簡単に死なないんだよ」

「リーデル…」

「だから、先に行こう」

「うん」

一番大きなカークにはリーデルとシゼルと一緒に乗り、一頭は置いて行く事を選んだ。装飾に付けられた華美な飾りを外し、全てその場へ置き去りにするカークに乗せる。

「今までありがとう！君も頑張った」

カークに告げると腹に鞭を入れた。誰も乗せていないカークが嘶いて走り去る。

「リーデル：私、アイツを捌いて食べれば良かったかなあ？」

「あれはほとんど筋だ！諦めろ！」

カークが消えて行った方角を遠い目で見つめっていると更に奥の方から砂煙が舞い上がっているのを発見した。

「なんか隊列がこっちに来る」

アリアが呟く。

商隊レベルではない隊列だ。足並みの揃い方といい、本格的に訓練を受けた軍隊だろう。

もちろんカリスト軍では無いと言う事は…。

「やっぱりアリアさん」

放したカークを引っ張ってくる黒髪の剣士が隊列の隊長なのだろう。アリアは脱力したように大きく息を吐いて彼に手を伸ばした。

「アル、シゼルを助けて！」

「え！？シゼルさん？？」

アルと呼ばれた男がカークから飛び降りる勢いでシゼルの元へ駆けた。

「軍医を呼べ！…ってか運ぶぞ！その方が早い！」

シゼルの身柄はあつという間に保護されたのだ。

\*\*\*

まだ少し頭がぼーっとしている。安心したのか、燃え尽きたのか…。

シゼルはすぐに輿に乗せてくれて自分達にも十分な水分を与えられた。

アリアからは自分達も輿に乗れと勧められたが丁重にお断りして再度カークに跨がった。

歩行の振動が身体に伝わって耳鳴りを覚えた。

自分達は目的に対して結構貪欲で、それを達成するためには体力だって付けるし、金だって、権力だって使う。時には命の危険だって顧みず死線を超えそうになるような体験をすることもあるけど、他人がそうなる事は望まないんだ。

旅の目的は総じて『無駄』だから。

そんな目的のために人を巻き込む事だけはしたくない。

震えが止まらないでいると後ろから駆け寄ってくる足音に気付いて顔を上げた。

「彼、シゼルさんを処置したのは君？」

毛並みの良い黒いカークに跨がった若めだが軍医と思しき身形の男性だった。処置…と言えるものかは分からなかったが勢いにおされて頷いた。

「そう。偉かったね」

軍医はニコツと人懐っこく笑って自分の頭をクシャクシャに撫でた。まるで小さい子にでもするようなその行為に面くらう。

「シゼルさんは大丈夫だよ。気にしてたから『牧場』に着いたらまた見舞ってあげて」

「牧場……え！？もう気が付いたんですか？？」

「うん。処置が正確だったからね。だから：『偉かった』って言ったじゃん」

そう言いながら軍医は足早に後方に戻って行った。

報告を兼ねて反射的にリーデルの方を向くと頭の上に大きな手が降って来た。先程グシャグシャにされた髪の毛を整えるように撫でると「良かったな」と口が動く。

「良かった……うん。良かった」

カークの腹を蹴ってリーデルを置いて前へ進んだ。アリアの場所まで追いつくと先程の黒髪の剣士と話をしていた。こちらに気付いてアリアは前を指差す。

「アレが『牧場』」

言われるまで目前に迫っていることにすら気付けなかった。突然視界が開けたように大きな牧場設備が目の前に広がる。

目を瞬いているとアリアが溜め息混じりに説明した。

「人避けの護符がはってあるみたい。近くまで来ないと一切の形を現わさないようになってる」

「それで迷ったのね」

かなり正確な位置を知っている者しか辿り着けず、更に身の危険を冒してまで無茶に進もうとは普通思わない。そんな位置にここは存在しているのだ。

「軍事施設？」

……と呟いたら黒髪の剣士がの表情が一瞬固まった。

「違いますよ……ただ、この場所は他国に漏らせはしません。だからあなた方も身柄の確保という形で中に連行します」

と剣を鞘から少し抜く素振りを見せつけてくる。あからさまな脅しにアリアも自分も全く動揺しなかった。…というか、脅していた当人の顔色が一番心配の色を点していた。

自分やリーデルはともかく。アリアとガチで殺り合うには一個隊では役不足だろう。

「あ、私アイシャⅡローマンです。お世話になりまーす」

「リーデルⅡウォンⅡカリクティスです。よろしく」

いつの間にか追い付いていたリーデルと小馬鹿にするような間合いで自己紹介した。

ガクツと肩を落とした黒髪の剣士はそれでもアリアに協力くらいは期待できますよね！とくらいいついてきた。なかなか気骨のあるというか…めげない人だ。

「俺は近衛団長のアリエストⅡアードレー。アイシャちゃん？可愛いいね」

「よく言われます」

「うわわ！アリアさんにそっくりなのに全然性格が違うし」

「私の方が可愛いです。目、悪いんですか？」

アルはツボにハマったようでそのままカークの背に伏して肩を震わせた。一頻り笑ってからアリアに向って自分を指差しながら言った。

「この娘、カインに会わせたい！絶対気に入るしウチの嫁にちょうだいよ」

「やめて…頭痛が酷くなる」

大袈裟にアリアがこめかみを押さえていると後ろからシゼルの乗った輿が自分達を追い抜いて牧場の建屋に入って行く。その一団の中に先程の軍医を見つけた。

「お嬢ちゃん、後でおいで」

と言って白い歯を見せて笑った。随分と無駄に爽やかな軍医さんだと感心してる自分をよそ目にそれを聞いたアリアとアルが目丸くする。

「アリちゃん、何？」

「あの人誰だか知ってる？」

「シゼルさんを診てくれた軍医さんでしょ？随分若そうだけど腕は良いのかしら？」

心配で興を覗き込むように目を細めるとアリアが頭をかきむしった。

\*\*\*

一番立派な部屋に通されるとアルはとても言いにくそうにお決まりの台詞を口にした。

「陛下の御前です。失礼のないように」

「今はただの軍医だよ？この隊の、ね」

と言いながら簡易的に造られた玉座に座っていたのは先程の軍医？いや本人が軍医って言うんだから間違いでは無いのだろうけど…近衛団長と名乗ったアルが恭しくかしづいているのだから…。

「シール王？」

「今はまだ代理です」

「軍医は？」

「だから僕。こんな小さい部隊に何人も要らないだろう？」

「えー…っ」と

頭を掻きながらリーデルを振り返った。自分達も貴族としてはそういう変わり者だが目の前の王様は更なる上に行く変わり者らしい。

だからか、王族に対して礼を弁えない態度をアリアもアルも咎める言葉は口にしなかった。

二人は王様らしくない王様が悪いって口々に言う。

そういうわけにもいかないだろう。と、いかアリアはそれで良くてもううちの相棒が許してくれない。権力者に対してはトコトン弱いリーデルに心中悪態づきながら頭を下げた。

「ご無礼を…」

「無礼なのは僕だろ？女性の頭をひっ掻き回したんだから」

自分の行為を王はカラッと笑い飛ばした。

毒を抜かれたようにその人を見上げてるとリーデルが咳払いをして続きを急かした。

「ご無礼を致しました、陛下」

「君の陛下じゃないよ。だから気にしないで良い。…それよりお嬢ちゃん、そろそろ行こう」

「え？」

「シゼルさんの様子を見に！約束しただろ？」

「はい！ぜひ！」

彼は自分の返事を聞くと満足げに笑った。すぐ立ち上がり、自分の腕を取った。

部屋を出てすぐ脇の小部屋の扉をノックもせずに開け放つ。

ベッドに横になっていたシゼルが慌てて起き上がった。

「寝てなきゃダメです！」

強く注意して近寄ると貧血を起こしかけてるシゼルの背を支える。まだ顔が青白い。

「申し訳ありません」

「シゼルさんは謝ってばかりですね。倒れる前にも謝ってました」

「そういう言われ方されてしまうと何も言えなくなりますね」

そう言いながら苦笑するシゼルの背中からゆっくり手を放した。

「随分はじめにお会いした時と印象が違うんですね。ただのわがまま令嬢かと思ってました」

「私も貴方はもっと大人だと思ってましたよ。さてはただの意地っ張りですね」

「意地っ張り？」

「ええ。お貴族様にとって顔色を変えないのは美德かもしれませんが旅先で自分の状態を正確に周りに伝えないのはただの意地っ張りか鈍感です！」

「申し訳…」

謝るのを途中で止めたシゼルの腕を取って言った。

「これについては改めて下さい。我慢は美德ではありません」  
「はい」

微笑んだ隻眼の貴公子の腕は体温が正常に戻りつつあった。短時間での回復、治療術に長けた者による施術だと分かる。この後ろで腕を組んでる変な王様によるものだと思うと腑に落ちない気はした。見た目で能力が測れないのは自分の従姉のちっちゃい軍人さん然り。依然として世の中はまだまだ広いと知らされる。

「カイン様、ご無礼を…」

「シゼル、彼女は謝るのを許したのか？」

「いえ…」

「じゃあ気に病むな。君の治療をしたのは下心がある」

…なるほど。と、すぐ納得した。

無償の加護では無いなら逆に安心できるってものだし、多分要件は自分達にではない。

後から入って来たアリアの方に全員の視線が集中した。

「何？」

「治療代は身体で払って貰おうかと…」

「か、身体って…」

「やだなあ、アリアさんの価値はその身体能力と戦闘能力の高さでしょ？あなたの女度に期待してません」

と王は快活に笑った。アリアは苦笑いを浮かべて「デスヨネー」、とつぶやいた。シールの社交界でアリアがどんなだったかを想像できるアルとカインの反応に身内としても苦笑いせざるをえなかった。タイミングを計ったようにアルが横に並び再び剣を抜く素振り見せる。

「皆さんはなんでこんな辺ぴな場所に？」

「野生化したシールカークを狩りにきたんです！」

アリアの動揺が伝わってくる。まさか真っ正直に言うと思わなかったのだろうが、それこそ甘い。こんな不利な場所で嘘付いたって良い事無いはず。バレてもそんなに問題無いんだから正直に言う方

が辻褄合わせをしなくて済むし。

それに対してアルは溜め息混じりに用意していたであろうセリフを口にする。

「シールカークは国の財源です。数も決まってるので乱獲は禁じられています。今の発言だけでも重罪に匹敵します」

「野生種では無いシールカークが野に放たれれば生態系が崩れます。乱獲：ならば罰せられますが、元々いないはずの品種を狩って誰が困りますか？本当の価値はこの生態系にこそあります。養殖種の野生化こそ食物連鎖を崩す原因となります。そうですね？」

黙って聞いていたアリアが一瞬ポカンと口を開けた。すぐに悔しそうに顔を歪めたが。

そう、このまま言い負かされていればアリアにはラッキー。計画を断念せざる得ない恰好の材料になったはず。だが残念ながらシールカークを食せずに黙って帰りはしない。

簡単に部外者に言い負かされてあげる筋合いは無いのだ。

肉弾戦は任せた！口撃は任せな！

内心鼻息荒く、外面では優雅に微笑む。これぞお貴族様の心意気！「やだなあ、このコ無駄に血の気が多くて好き！絶対うちの嫁に欲しいわ」

：と、アルは好戦的なこちらの態度とは裏腹に破顔した。

お生憎様で我がローマン家は婿入り希望だ。嫁に行く気は更々無い。

噛み付かんばかりに睨み付けてるとアルは勝手に納得して、仕切り直した説明が始まる。

「シールカークが野生化したのは通達通り。ついでにシールカークは野生化したせいで近隣の家屋の人間の食べ物を狙うそうです。凶暴性が増してるのか、牧場側では捕獲も難しいために軍部が派遣されました」

「軍部でも難しい：ってことですか？」

「：はつきり言えばそういう事ですね。アリアさんなら出来る事が



ある、と言わなければならない。」

アルが一度主を仰ぎ見た。王がニコニコとしながらアリアに言う。  
「結果術を張ってもらえませんか？」

「どこに？」

「砂漠一帯に。カークが逃げてしまわぬように」

「広範囲ね」

「だからアリアさんに頼んでいます」

「簡単に言うけど…」

「やってください」

と、言いながら王は自分とシゼルに自らの手でナイフを突き付けた。部下が部下なら主も主か…。アリアは眉を顰めた。少し押し黙って様子を伺い、ゆっくりと決意を固めたようだ。

「良いけど簡単じゃないから」

「もちろんです。そうじゃなければ敵国の人間にこんな事頼みません。明朝から始めますから今晩は寛いで下さい」

アルが手を叩いて合図をすると小柄な男と年頃八、九歳の娘が入って来る。

「牧場主のゾラハハチエットだ」

「滞在中はなんでも申しつけてください。皆さんお腹が空いたでしょう？アルさんは話が遠回しで困りますね。さあスープが冷める前に食べて下さい」

無遠慮に言って朗らかに笑う主人にアルは苦笑いを浮かべた。

扉の向こう側にはいつの間にも用意したのか食事が準備されていた。食いしん坊万歳な自分達は目をキラッと光らせる。それでもリデルは素振りを隠し、礼を持ってカインを見つめた。自分はそんな相方を素知らぬ顔で無邪気を装い喜んでみせる。

「わーい！ご相伴に預かって良いですか？おっ腹ペッコペコです」  
「もちろんどうぞ！そのために用意したんですから」

人好きそうな主人は自分の肩をポンッと叩いてテーブルの方に案内した。シゼルにはまた後で、とアリアが告げたのを見掛けた。シ

ゼルを残して素晴らしい香りの充滿した別室に移動する。

「うえっ!!」

後ろから呻き声ともとれる奇声が聞こえた。

優雅にハンカチーフで口を覆ったリーデルが白い目で呻き声の主を見下ろす。

「だからあなたは下品なんですよ。だいたいここが牧場なら出てくるご馳走だって予想できるでしょう?」

冷やかな態度のリーデルにアリアは必死に反論しようとした。

だが口を開き、息を吸い込んだせいでまたもがくような声を上げた。自分は全く平気でアリアを見下ろしながら首を傾げる。

「アリちゃん：シールカークの発酵塩漬け食べた事無いの?」

「なにそれ?」

「シールに何年住んでるの?もう赴任も長かったよね?名産物くらい食べなよ!接待くらいあったでしょお?」

「いや、まあ接待はあったけど:」

「:カークを塩漬けにしたものを更に発酵させる事で保存も出来てコクが増します。残念ながら薫りは強い腐臭とアルコール臭になりますが味は一度食べたら病み付き。シール王国の特産品で本来は砂漠運搬で働いていたカークが引退する時に供養の一貫で骨身丸ごと保存用に造り、次回の旅で御守りとして持っていき、丁度半分の行程で旅の加護を願って食べるものですが、一部だけはシールカークで造られた肉厚なものが海外への贈答用に製造されてます。高い金子を積んでもなかなか手に入らない貴重な珍味ですが:その工場もここが兼ねてるんですか?」

と、最後はゾラへ質問した。それに対して誇らしげに頷く。

アリアはさすがにゾラの歓迎の意図を悟ったのか押し黙って席に付いた。

陛下はパチパチと後ろで手を叩いた。

「お嬢ちゃんは詳しいね!」

「:陛下、申し遅れましたが私はアイシャローマンと言う名前が

「ございます」

「そう。：でお嬢ちゃん」

「ア、イ、シャ！です。陛下！」

「分かったってお嬢ちゃん」

今にも掴み掛かりそうな勢いで反論しようとする自分の身体を押さえたのは権力の亡者、リーデルだった。アリアはいい気味だとも言わんばかりの目をこちらに向けるし…。

リーデルと揉み合っているとやり取りに陛下が吹き出して笑う。

「嘘。冗談だよ。アイシャ、でも僕の名前は陛下じゃない。極力そう呼ばれたくないんだ」

「え：でも…」

「カインⅡルーズベルト」

「カインさ、ま？」

「カ、イ、ン！様は要らないよ。仕える気はさらっさら無いって顔して上っ面だけで呼ばれてもあまり嬉しくないんだ」

「はい。カイン」

ようやく食卓に付くとゾラが不満げに食事が冷めます、と言いなからスープをよそった。

娘はキョロキョロしながら見知らぬ客に戸惑っている様子だったので代わりに自分が立ち上がり、パンをサーブした。リーデルはお貴族様らしい美しい所作で、らしくない下働きの手伝いを手慣れた様子で葡萄酒の栓を抜いた。グラスに優雅に注いでみんなに渡す。

カインはさすがに席に付いていたが、まだカークの塩漬け臭のダメージから抜け切れないアリアは椅子の背もたれに向って何度も吐き気を催していたようだ。

アルが後から入って来てアリアに大丈夫？と声を掛けていた。

「大丈夫じゃないかも…」

「ははは！まあ普通のカークの塩漬けはシール人でも好き嫌い分かれるよ。でもシールカークだって言われたら鼻に栓してでも食べるかもなあ」

「そーなの？」

少し炙って薫りの増したシールカークがアリアの前にやってきた。涙目になりながらも必死に口の中に入れるそれを見てリーデルと自分は深く頷いた。これ以上失礼な素振りをしたら拳で語り合わなければいけないと思っていたので案外大人なアリアにホッとした。

ゾラは誇らしげに笑う。

「どうですか？うちの肉は？」

「はい！脂がのっていてとても美味しいです！発酵塩漬けは初めて食べましたが聞いていた以上にコクがありますね！臭いのは帳消しに出来るクセがあります」

「お若い方でそこまで偏見無く食べる方は珍しいですよ。いっぱいお食べなさい」

「ありがとうございます！…でも、もし外に野営している軍人さんの分があるならそちらにも分けて下さい。私たちは観光目的で来る上にお邪魔してしまったので…」

「いえ。陛下のご友人を持て成すのは当然です。でも…そうですね、お肉を女性に無理矢理食べさせるのも可哀相なので、残りは外にまわしますか？」

とゾラは笑った。カインもそれを了承して頷く。

正直もう少し味わいたいのは山々だがここにずっとその元凶があると明日の中心人物アリアのモチベーションが下がりそうなので早々に下げてもらう。

ふと娘の方を見ると彼女は肉を出されていなかった。

シールカークがそれだけ貴重だからなのか、いやスープにも手をつけていない…？

「あの…娘さん…」

「リラと言います。申し訳ありません。娘は肉が食べられないので、今日出した食事は食べられないのです。この砂漠の状況下では野菜ばかりを食べる事も難しいので本来好き嫌いをしている場合では無いのでしょうか…お恥ずかしいばかりです」

パンをかじって我慢しているがいつもは野菜スープで出しているのだろう。ふんだんにカークの燻製が入ってるスープには手を付けられないようだ。

キヨロキヨロしてたのは人見知りじゃなくて食べられそうな物を探してたのかもしれない。

「リラちゃん」

「なあに？」

「パンだけじゃお腹減らない？」

「だいじょ：ぶ」

リラは小さな声で答えた。だがいつもと違う食卓にはとても納得できてなさそうだ。

「リーデル、荷物にドライフルーツあったよね？」

「取って来るよ」

不作法を謝って席を立つリーデルに感謝した。さすがに自分達のために普段の生活を乱されているのを見ると申し訳ないし。

顔をあげてカインの方に微笑んで説明した。

「私たち先日メリウス皇国から入国したんです。旅暮らしなのであんまり食べ物のお土産みたいなものを買って歩くことはしないんですけど、保存が利くのでドライフルーツを多めに購入したんです。もしお許しいただければデザートにいかがですか？」

「メリウスのフルーツ？メリウスの果樹園がある地域って結構離れてるよね？？」

「はい。更にその反対側、レイバード王国から入国したので：」

「随分長い期間カリストから離れてるんだね」

「はい。これが仕事なんです。私たち、グルメルポライターなので「だから妙に世界情勢に詳しいのか」

「詳しいのは情勢ではなく世界の食べ物です。それにシールには初めて来ました。せっかく知り合いが大使館勤めなのでなんでも色々食べてみたくてお願いしたんです」

「それはお願いする人を間違えたね。アリアさんはシールに着任し

てすぐの頃の晩餐会で、シールカークのタタキを吐いたせいでカリストの人間は嫌いなのかとうちの料理長が氣遣ってるんだよ。以来アリアさんが出てくる晩餐会にはシール料理は出してないんだ」

「吐いたんですか！？人前で？恥ずっ！」

非難の目を向けるとアリアは目を反らした。なるほど、それで色々食べた事なかった訳か。きっとカリストの令嬢には口に合わなかった、とか言われたんだろうな。レアで焼いた血の滴るステーキが食べられて、タタキが食べられないのは食わず嫌いしてるだけだと思っけど。

そこにリーデルが袋を持って戻ってきた。その袋の半分をリラの手にそのまま渡してあげた。残りはゾラにお願いした。

確かに量的には多いかもしれないがシールカークの代金としては安いくらいだろう。それでも代金を貰うつもりが無かったゾラは申し訳なさそうにリーデルにお礼した。

「氣を使わせてしまって申し訳ない」

「こちらこそ、色々美味しいものをありがとうございます」

リラは中身を見て、珍しい果物に目を輝かせながらそれを食べていた。

\*\*\*

その夜、なかなか眠れずに：ようやく寝付けたところでまたふと目が覚めた。

客室にアリアと二人で寝かされたせいで夢見が悪かったのか：。

「眠れないの？」

「うわっ！起きてたの？」

「軍に居た頃の癖で動く氣配があると起きちゃうのよ」

とアリアが身体を起こした。それでは他人と同じ部屋ならほとんど寝られないという事になるのではないか？リーデルじゃないが軍なんて入るものではないな。

「先寝てて。寝付けそうになるまで散歩してくるわ。私は明日お留守番してても良いし、あなたを寝かさないとまずいでしょ？」

「…心配ごとがあっても寝られないって風には考えられないのかしら？」

「なにそれ？私のこと心配なの？」

「一応陛下から預かった大切な方なので心配ですよ」

「じゃあ私のために明日は頑張ってね、ア～リちゃん」

と茶化しながら部屋を出た。こんな時ばかり大人になられても困るのだ。

自分がいつまでも大人になれないことを突き付けられているようで…。

扉を出るともう一つ小さな気配を感じた。

（リラちゃん？）

…だと思う。影しか見えなかったがそのくらいの大きさのものが通り過ぎて行ったから。

自分とはともかく…年端もいかない子が闇雲に外に出られた状況では無いだろう。簡単に考えればシールカークが野生化して大暴れのだから。

頭を搔きながら一度戻ろうかと考えたが、今アリアと話すとケンカになりそうだからやめにした。代わりに隣りのリーデルの部屋を勢いよく開放つ。

「なっ！？お前っ！！鍵！！」

「鍵？んなもん扉を壊したら意味ないんですぅ」

「扉は壊れてないだろーが！」

「良いからちよっと付き合いなさい！」

「言われなくなつて…いつだってどこでも付き合ってるだろ？」

と、リーデルは身形を整えて仕込み杖を握った。毎度の事ながら話が早くて助かる。

「リラちゃんが建物の外に出てった」

「止めろよ！」

「止める前に外に出てったのよ。だからリーを呼びに来たんじゃない！」

「行くぞ！」

リーデルはバツとマントを翻した。

先導するように前を走ろうとすると襟首掴まえられて後ろに戻る。

「お前は先走るな！」

強めに言われて肩を疎めた。

リーデルを追い抜かないように後ろを走り、建物の外に出た。360度砂漠の世界だが遠くに行かれてしまえばこの施設に張られた結果の作用で見つけ辛くなるだろう。二人で目を凝らすと小さな寝間着姿が砂山を登るのを発見した。

さすがに砂漠暮らしと関心するべきか子供の足にしては随分と早い。

「リラ！戻れ！！」

リーデルが叫んだ。音が砂漠の砂に吸い込まれるように遠くに届く感じがしない。

リラは一瞬動きを止めたがすぐにまた操られたように砂山を裸足で駆け出した。そう、裸足なのだ。まるで夢遊病のように彼女は彼女にしか見えない何を追いかけるように一直線に進んで行く。この目印の無い広大な砂漠でコンパスを持っているわけではないのに針路に迷いが無い。

「うわあ…嫌な予感するう」

と呟くと相棒は白けたように真っ当な返事をした。

「本当に嫌な予感がするならアリアさんと呼んで来れば良いのに」

「それとこれとは別なんですっ！私はあの人嫌いなっ！」

「嫌いならもう構わなければ良いじゃん」

「嫌よ！あの人の嫌がらせをしながら旅をするって決めたんだもの。旅のルールなのよ」

「じゃあ……まあ行くぞ」

「うん」

砂漠慣れしてると言ってもリラの身体は子供だ。



手足の長さが違う。力が違う。

二人で本気で走れば：

走れば：追いつけない？

こんな事ってあるのだろうか？夢遊病じゃ済まない。身体能力の限界を引き出しているかののように四つん這いで駆けて行くリラの姿に二人で絶句した。でもここで諦めるわけにもいかず、かと言って戻って助けを呼べば見失いかねない。

必死に見失わないように跡を追う事しかできなかった。

それから必死に走る記憶しか残って無い。どこをどう：じやなく本当に彼女は真直ぐ走った。だから追いやすかったのは確かだ。小一時間追跡していると小さな森のような場所まで辿り着いた。

牧場からは全く見えていなかった森林地帯に真直ぐ着いた事も奇妙だったがここが目的地であることは確かだった。

リラが四つん這いから二足歩行に戻ったからだ。

自分達は気付いてみれば体中砂塗れ、所々に隠れた岩や石に躓いて傷だらけのボロボロになっていた。

リーデルが苛々しながら砂を払っているのを宥めながら森に入った。

その森はたった一本の大樹で出来ているようだった。その根も大地の乾きで浮き上り、それでも力強く地表に立つ。世界を周ればそれなりに樹齢何百年クラスの神木などにも当たったりするが、そのクラス以上の樹だと感じた。

まるで天然の結界でもあるかのように鎮かな場所。もたらす空気濃密さに酔ってしまうかと思った。

水の音と葉っぱが擦れる音がする。その中に、小さな嘶きが混ざってきた。

「あのさ：人って吠えないよね？」

「吠えたい時は：吠えるんじゃないか？」

と、言いながら確かめる為に奥に走った。視界を邪魔する様に垂れ下がる大きな枝をかき分け、部屋のように窪んだ場所に辿り着い

た。

そこに広がる光景に二人とも目を見張った。

砂漠で乗ったカークよりも一回り大きいカークの群。自分達の身体と同じように砂だらけではあるがただのカークのように栗毛ではない。

精肉しか世には出回らないので初めて見たが間違いないと思う。数々のシールカークの文献によると夜に映える月毛を持つ。毛艶、脂肪と筋肉のバランス美を見てもこれは牧場で調教されていたとは思えない。

「逃げたシールカークか？」

リーデルの呟きにリラが身を凍らせた。リラが怯えるのを感じてか、シールカークと思しき動物が唸り声を上げてこちらに牙を剥けてきた。リラは自分達の顔を確認するとカーク達に首を振った。

リラの合図のおかげで自分達の事を敵ではないと確認して、シールカークは少し奥に入って眠るような姿勢を作った。

様子を伺っていたリーデルが息を吐いて抜こうとしていた仕込み杖から手を放した。

「リ、ラちゃん」

「い、わ…ないで」

「え？」

「カー、クがここにいたい。カー、クはここにるのが、いい」  
リラは小さな体で、か細い声で、一生懸命に言葉を紡いでいた。

それでも言いたい事を伝え切れない事に苛立ち、彼女は呻きながら涙を流した。

落ち着かせるために彼女の小さな肩を撫でてゆっくり次の言葉を待った。

「牧、場…あ、ぶ、ない」

「え？」

「あぶ、ない。カ、ーク、がい…た」

リーデルと目を合わせた。

「リラちゃん、それは誰が教えてくれたの？」

「…」

自分の質問にリラはただ横に首を振った。まるで…言いたくない、言えない…とでも言う様に。

「リラちゃん：訳を言えば協力してあげられるかもしれないけど今のままならあなたをここから連れて帰る事しか出来ない」

「カークがおしえ、てくれた」

「え？」

疑う様な目線になってしまったからか、直後にリラは泣きじゃくって癇癪を起こした。

困り果てながら彼女をあやしているとリーデルが呟いた。

「牧場が危ないってカークが教えてくれた？」

「って言うてましたね。カーク達、どうしましょう？野生化してないからシール王国のものになるのかな：勝手に狩ったら怒られるよね？」

「食べる算段を先にしちゃうんだ？」

「他にも考えてるよ！リラに：人間に懷いてたら多分襲ったりはしないはずなのにどうして民家が襲われたのか：とか」

「カークじゃない何かが街を襲ってるって？」

「：ワカンナイです。私専門家じゃないですし」

「そうだな。取り敢えずリラを連れて戻ろう。専門家に訊けば良い」

「アリちゃんは軍人だから解決は全て暴力沙汰ですよ」

「ゾラはリラの父親で牧場主だろ？」

「確かに専門家だね」

リーデルは納得した自分を確認して泣きやまないリラを肩に乗せた。

リラは驚いてか、一度泣きやんだがすぐに再燃して泣きじゃくる。それを赦さないモノがいた。

先程まで休んでいたシールカークが前脚を蹴って大きく嘶いた。

「リー！」

「そんなのに構ってる場合じゃないだろ？行くぞ」

と平静にそういう返事が返ってきた。言葉と同時にカークの何頭かがリーデルの杖で吹き飛んだ。

それを見てリラは更に声を高くする。

「リー、その子を渡して下さい！」

「手荒にするなよ」

このまま連れて行く方が手荒になるってものだ。

首筋を指でトントンと二か所突いた。

リラはそのまま白目を剥いて意識を失った。

「超手荒！！強行手段！！」

「うっさい！リーが泣かしたのが悪いんです！」

意識が無くなったリラを見てかカークの鼻息が更に荒くなった。

もうここからは自分達の脚力だけが勝負だ。

何せ四つん這いの主との勝負。二足歩行とは脚力が違う。家畜に成り下がっていたとはいえ、基は砂漠運搬に適した種族。到底勝てる訳が無い事も承知している。取り敢えずは来た道をリラを背負って走り抜ける事しか思い浮かばなかった。

森を抜け、砂山を走る。途中靴が脱げて裸足になっても、足の裏が切れても、とにかくそこから離れる為に走った。

ふと気配を感じない事に気付いて後ろを振り返るといつの間にか夜の静寂が周囲を包んでいた。

追跡者はとうにいなくなっていたようだ。

リーデルが倒れ込む様に砂漠に伏した。小さな子とは言え、人を一人背負ってこの走り難い砂漠を駆けて来たんだから無理もない。

その動作で背中少女が少しバランスを崩した。ぶらぶらと下がる腕を拾ってリーデルの背中に戻してあげる。

拭う意味も持たないくらい汗だくな彼の首筋から汗を拭い、ようやく自分も安堵の息を吐いた。

「アイシャ、あのカークは何か怪我してるんじゃないのか？」

「リーがやったんでしょう？」

「俺がやったのはせいぜい峰打ち程度。致命傷にはなり得ない」

「つまりすでに致命傷をおっている？」

「ああ。追ってこないところを見たってそうとしか考えられないだろう？」

確かにあのカーク達は、リラを自分達の子供とでも思っているかの様な怒り方をした。本来なら追いつかれて骨の一本くらい噛み砕かれたっておかしくない。

恐ろしさを認識して身震いした。

「取り敢えず牧場に帰ろう」

「ああ、リラも様子を見なきゃいけない」

「眠ってるだけよ」

「思いつきり白目剥いて寝る訳ないだろ！加減をしろ！」

「にゃはははは」

ご指摘ごもつとも。このまま連れ帰れば自分達は幼女暴行の犯人になってしまう。そおと起こさないようにリラの瞼をようやく閉じさせてあげたのだった。

\*\*\*

ようやく牧場へ辿り着いた頃には、空はすでに白んでいた。

振り回された夜に別れを告げるとあって二人は急ぎ足に正面玄関口の扉を開いた。

少し、気が緩んでいたのは確かだ。いつもなら少し覚悟もできていただろうし、ましてや正面から入ろうなんて思わなかっただろう。ヘトヘトの身体に思考回路が追い付いて行かず、出迎えるように玄関に仁王立ちしている人影を見て露骨に嫌な顔をしてしまったのは更に拙かった。

仁王立ちの主はアリアだ。自分が目を反らすのを確認してリーダーが溜め息混じりに前に出た。

自分が相手にするには相性が悪い。煙に撒くだけなら良いが、負け試合の決着をつけなければいけないような状況下ではちよつと分が悪過ぎる。

ホッとしてるうちにリーデルが代わりに尋問を受け始めていた。

「小さな子をどこまで連れ回した訳？」

「連れ回した訳じゃありませんよ。どちらかと言えば連れ回されただけです」

「分かりました。言い訳は中で聞きましょう。リラちゃんの容体についてでも訊きたいし」

何にも分かつちゃいないだろう彼女は顎で偉そうに合図した。渋々従うしか術が無くリーデルに先を促された。

広間に入るとすぐにゾラがリラを見つけてリーデルの肩から乱暴に奪っていく。

人として見捨てる事が出来なかったからリラの後を追いつけた訳だが、完全に誤解されたようだ。リーデルが複雑そうな表情で首を振った。お貴族様思考のリーデルには耐え難いだろうから心中お察しします。

「リラ！リラ！！リラに何をしたんだっ！？」

と叫ぶゾラの腕の隙間を縫ってリラの首筋の後ろをトントンと突いた。

直後、彼女は仮死状態から復活する。

いつの間にか父親の腕の中だ。訳が分からず目を白黒させていた。だが自分達を見るなり怯えた表情を浮かべた。

流石と言うべきか、アリアはそんなリラの様子を見逃さなかった。リーデルに後ろから剣を突き付けて罪状を述べる。

「女兒誘拐容疑で話を聞かせてもらおうわ」

「その前にリラに聞きたい事が…」

「往生際が悪い！」

…と、リーデルとアリアが派手に言い争うのを良い隠れ蓑にリラの側までむかう。

ゾラはリラのを遠ざけようと身体を捻ったが自分の腕の方が素早かった。ゾラの身体を右手一本で無理矢理こちらに向かせ、リラにゆっくり諭すように話し掛けた。

「カークを助けたいなら、ちゃんと自分で言わなければ」

小柄なゾラでも働き盛りの男性だ。まさか小娘の右腕一本で身体の動きを封じられるとは思っていなかったようで自由になった肩を何度も確かめていた。

そんなゾラの腕の中で震えながら、それでも必死に考えているようだった。

カークはあの森で動けなくなっているとしたらカークよりも強い生物から格好の餌食なのだから。

リラはまた泣くかと思った。泣くなら、それでも良い。泣いていつて解決にはならないということを彼女は知らなければならぬ。自分達はなんといわれようと無実なのだからそれは後からでも証明できる。でもカークを助けるのは今しかできない。

ちゃんと選択出来ないならそれまでだ。

リラは大きく目を開けてパクパクと口を動かした。悔しさからか、焦りからか、声は出ていない。

背筋に手を当てて深呼吸を促すと小さく掠れた声が聞こえた。

「たすけ…て、たすけて！ともだちをたすつ、けて！！」

リラが発したメッセージを一番に受け止めたのは父親のゾラ。心当りがあるように呟いた。

「友達？逃げ出したカークか？」

「リラが、この牧場を抜け出したのをリーダーと二人で追い掛けました」

「抜け出した！？なんでそんな事を！？」

「友達を匿っていた場所に向ったようですよ。リラちゃんは真直ぐ迷わずカークの居る森まで行きました」

「匿う…って何から…？」

「…さあ？私たちリラちゃんとあんまり上手に意思疎通が出来なかったので困り果てて連れ帰って来たんです」

「リラ…」

意思を伝えられない難しい娘に途方に暮れるようにゾラは呟いた。

正直どっちでも良いんだ。

自分達が無実で、カークは野生化していない。狩りが出来ないなら次のカークが出回るまでの一年間はアリアに寄生してシールに滞在する事もできる。

リラはゾラの服を必死に握って言葉をひねり出した。

「ここは、ねね、ねらわれてる」

「またそんなことを言って……この子は毎年カークの出荷時期になるとこういうことを言い出すんです」

「ホントだも……」

大粒の涙。リラが今まで本当のことを言っていたかどうかはわからないが、今は少し耳を貸すことも必要だと思う。

少しリラを気の毒に思った。

その時だ。この牧場全てを覆う振動にその場にいた全員が顔を見合わせた。

一番行動が早かったのはアリアだ。さすが軍人様。平衡バランスをすぐに取り戻してリラの肩を掴んだ。

「リラちゃん！狙ってるのは地下から？もしかして蟻地獄？」

そのアリアの言葉に自分もハッとした。砂漠であることをちゃんと分かっていれば或いは気づけたのかもしれない。ここが狙われるとしたら外からではなく、地下からだ。

地下を掘り下げられて彼ら蟻地獄の巣へと誘われているのではないのか？

この建物はもしかしたら沈んで行っているのではないか？

「早く出なきゃ！」

「アリちゃんはリラちゃんとゾラさんを！」

「了解」

自分の合図でアリアは建物の外に二人を引き連れて走った。リールはカインとアルを先導しようとするが二人は自分で行けると断ったため、自分のところに帰ってきた。

全員で脱出するために出口に走ると、外の光景を前に身動きが出



来なくなった。

既に見事なまでに絡め取られてしまっている小隊の姿。

カインが連れてきていた隊はこれで全滅だ。

もっと早く気づけていたなら彼らを巻き込むことは無かったはずだ。

「…………カイン、私がいなくて蟻地獄は倒せる？」

「アリア…………？」

「リーデルの实力は保証するけどそのアイシャはただの小娘」

小娘呼ばわりされてムツとしたが事実に関わりなく近いので押し黙った。そしてカインは決断するように頷く。

「大丈夫だよ、アリア。アイシャは僕が守る」

「いや…………できれば何らかの形でお亡くなりになって頂きたいんだけど」

「アリア？」

「なんでもありません。じゃあこちらはお任せいたします。なので小隊とハチュットさん達については安心して下さい」

そういうとアリアはパチンと指を鳴らして外側、小隊キャンプ地一帯を結界陣で囲った。すぐに地平は浮き上がり、砂もキャンプ地も人もカークも全て…………球体の結界陣の中に収まった。リラとゾラはそれを見上げて呆けていたがアリアがそこに入るように促した。「中は安全だけど身動きは取れません。残念ですが…………この結界魔法は人を助けるものではなく人の動きを封じるものです。でも私が生きてる限り安全」

ってアリアはゾラに言った。その言葉で決心して二人は内側に入る。

中央に磁石でもあるかのように結界の中に手を入れただけで二人の身体は中に吸われて動けなくなった。建物の大きさぐらいある結界だ。正直言ってアリア以外に張れないのだろう。アリアでも他のことは出来なくなる位にいっぱいといった様子だった。

「その中…………私も入った方が良い？」

多分みんなのお荷物決定の自分は自ら名乗り出てみた。アリアが怪訝そうに眉を顰めて返す。

「アイシャはやらないだけでしょ？」

「……………」

アリアの言葉にリーデルも深く頷いた。

あんまり過大評価されたってこっちは困る。軍のエキスパートとそれに剣術の才能を認められている人間。そんな二人に並べる肩は持ち合わせていない。正直言って結界に入れて下さいと懇願したい。彼女たちは決して自分に逃げを許さない。断りようがないように言ってるんだ。

「……………嫌な言い方」

「アイシャ様には劣りますよ」

「こういう事になっても知らないんだから！」

そう言っただけの自分の両の手を摺り合わせた。

力を練るときに自分がよくやる仕草にリーデルが満足そうに目を細めた。やっとやる気出したか、って聞こえんばかりに。

全体を抜くように陥没していることが建物内部からでも分かったが、屋上に出るとそれは一層分かり易い。この陥没はもう多分止められない。被害を出さないように抜けるには蟻地獄本体を仕留めるしかないのだ。

リーデルは仕込み杖をバラして弓の形に変形をさせるとニコニコしながらこちらに「ハイ」と渡してきた。

「自分でやっても良いんですよ？」

「得意な人間がやるべきだ」

「リーだって苦手じゃないのを知ってます」

「俺より得意な人間を差し置いてやれないです。どうぞ」

言い争っている場合でないことも承知。でも期待を掛けられることになれていないのだ。

自分が弓を取ると砂が自分達を襲うように振ってきた。これでは目眩ましになってしまう。カインとアルもそれを被らないように自

分を覆うように立ってくれた。守られるだけの方が楽なのに………  
：それ以上を期待しての彼らの行動は正直言って自分には重すぎる。  
だがやるしかないことも知っている。

世界一の強運を自負している自分としてはこれを外すわけがない。  
視界が悪くなった周囲と反対に研ぎ澄まされる感覚がこちらを狙  
う者の場所を教えてくれる。

「そこだ！」

目を開けて一点を狙い、矢を打ち放った。

ドスっという鈍い音が砂ではない何かに当たった証。すぐに砂  
嵐は退けて視界は明瞭になる。

\*\*\*

気付いてみれば牧場は跡形もなく崩れちゃってるし、みんな砂ま  
みれのボロボロだった。でもみんな生きている。

これから砂漠の熱射地獄を歩いて渡らなければならぬのだから  
大団円にはほど遠い。だがみんな五体満足で生きているのだ。

「さすがアイシャ。やれば何でも出来る子だな」

子供扱いするようにリーデルはワシャワシャと髪の毛をかき混ぜ  
て笑う。

温かい風が通り抜け、空を見上げれば太陽は厭味な位にガンガン  
自分達を照らしていた。クソ熱い砂漠横断の始まりだ。

そんな出鼻を挫くように空を仰いでいる自分の近くにカインが寄  
ってきて突然跪いた。

王族である彼がそんな姿をすることはアルにとっても自分達にと  
っても不可解な行動で慌ててカインの身体を起こそうとした。

だがカインは周囲の手を止めて自分にこう言う。

「アイシャ、僕と結婚して下さいませんか？」

周りのみんな自分を含めて声にならない悲鳴を上げた。彼は軽々  
しくこんなことを言って良い立場ではないのだ。特に出会ったばか  
りの得體も知れない自分に対して。

「会ったばかりだとかそういう理由で断るならシール城にしばらく

滞在しなさい。君は絶対僕に合うよ」

ニコニコと押しの強い殺し文句を言う王子様に引きつってしまっても押しで負けるわけにはいかない理由があった。自分が逃げ回るように旅をする理由がある。それを曲げるわけにはいかず彼の目を真っ直ぐに見つめて頭を下げた。

「私、婿養子希望なのでお嫁には行けません。これだけはどうしてもなんです」

「理由……それじゃ納得できないよ。王家に嫁ぐことはどこの貴族でも良縁なはずだ」

「私も、王族です。カリストの皇位継承権第一位なんで、まだ王子様のあなたとオンナジ」

そう言って微笑むとアリアが少し不満そうに顔を顰めた。

自分の地位は皇室パスがある限り保証される。そしてカリスト帝国に足を踏み入れない限り、現皇帝イデアとの約束は守られている。腹違いの妹である自分は現皇帝唯一の親族。

アイシャは自由を、イデアは玉座を。

そして自分はイデアの跡継ぎを産む約束をしているのだ。だから子供が他に縛られてしまうような結婚は出来ない。それが自分達の間で交わされた約束なのだから。

ギュッと拳を握りしめてもう一度頭を下げた。

「個人的には嬉しいです。あなたが好きとかそういう以前の立場ですけど好意は素直に嬉しい。でも無理なものは無理です。あなたがシールの玉座を捨てない限り」

リーデルが小さく溜息を吐いた。彼が安心する理由も自分と一緒に彼は自分の監視役。

リーデルは自分が皇室の意にそぐわない恋愛をしようとしたら切り捨ててだろう。

いつもイデ

ア陛下の手の内で自由という不自由を約束されている。それでもまだ玉座に座り城という監獄に居るよりはマシなのだ。

どうして自分達はこんな枷を背負って生きているのだろうか？自由  
に焦がれて、ここまで来て……………幾年旅をしてもずっと答  
えは見つからない。

（まだ……………子供を差し出せば自由になれる自分は良い方だ）

だからアリアは自分を嫌うのだ。

だからゴメンナサイともう一度頭を下げた。

\*\*\*

世の中のわだかまりなんて一緒に美味しい食事を囲めば全て帳消  
しにされる。自分達はそう信じている。

牧場から命辛々帰って一ヶ月近く過ぎようとしているある日、王  
城に招集が掛かった。

アリアとシゼルと自分とリーデルに、だ。

正直言っに行きたくない。だってプロポーズをみんなの前で断っ  
た相手だ。アリアへの嫌がらせやシルカークを食していないこと  
を理由にまだ残っていたがさっさとこんな国おさらばしてやれば良  
かったのだ。

外交官の制服に身を包んだアリアとシゼルも流石に浮かない顔を  
していた。当然だ。正式なお誘いではなかったとはいえ、外交トラ  
ブルを目の前に行っているようなものだ。

でもリーデルは素知らぬ顔で付いてくる。こういうところはすご  
く頼もしい。

いつ見ても素晴らしい造りをした碧い城は今日に限っては遠くか  
ら見つめていたい。

そうは言ってももう場内に入城してしまったし逃げられないのだ  
ろうが……………。

虚ろな視線で従者に案内されて中庭に用意されたテーブル席に座  
った。

美しい庭園を眺めながらのガーデンパーティなんてただの賓客の  
立場なら大喜びだがプロポーズをお断りした招かざる身としては肩  
身が狭いことこの上ない。実は怒りや厭味を百八十度間違っ

成してるだけじゃないかと捻くれて考えたり。

「アイシャ……多分大丈夫ですよ」

シゼルが自分の様子を見て控えめに励ました。

「うちのアリアもその昔……それこそ王子が成人して間もない頃にこっぴどくプロポーズを断ってますから。でも全然二人とも気にしてないです」

「え……それって」

若気の至りで許される若さならそりゃ良いが、結婚適齢期もど真ん中の王族男性となればまた話は変わってくるのではないだろうか？でもなんかムカつく。多分……カインのあの言い様……。シゼルの話してくれた内容でムツとしてもいられないことは分かった。

カインとアル、それに女官達が料理を運びながら彼らの後に続いて入ってきた。

「ようこそ、アイシャ」

ニコリと微笑んだカインの美しい顔が憎らしく思える。

「カイン、『君は絶対僕に合うよ』と言った根拠はこの女……アリアと私が似てるからですか？」

それを耳にしたアリアも身体を一瞬震わせて凍り付いた。自分達の中では『あり得ない』侮辱だ。

「代わりなんかに求婚なさらないで、改めて……アリア姉様にご結婚を申し込まれては如何ですか？アリア姉様このままじゃ一生独身だし」

そう言って席を立とうとした。だがリーデルが自分の腕を掴んで席に戻す。

「リーデル！」

「アイシャ……シールカークのタタキだ」

呆然としたようにリーデルは呟いた。そう目の前で見覚えのあるコック帽の男によって捌かれているのは新鮮なシールカークだ。そして捌いているのはゾラだった。

「アイシャさん、アリアさん、今日は私達がお礼をしたくてお城を貸して貰いました。存分に召し上がって行って下さい」

薄い桃色の肉は透けるぐらいの薄さにスライスされて大輪の花のように盛りつけられる。タレは必要ない。付け合わせに盛られた粒の粗い塩を好みで……………。

美食家垂涎の料理を前にしてしまつたらプライドをズタズタに引き裂いても席にへばり付く。ハッキリ言おう。世の中にはどんなに金を積んでも、どんなに権力を使っても食べられない物もあるのだ。それはこのタイミングでしか食べられない物。運の必要な物。

特級品のシールカークのタタキなんてシールの王族以外は食べることが出来ない。そして特級の調理師の意味を表すその背の高いコック帽。ゾラの手によって捌かれているそれは品質を超越してまろやかな味わいを産み出すだろう。この品々を前に席を立つことは出来なくなつたのだ。

現金な自分達を白い目で見るアリアは呆れを通り越して笑った。

「アリちゃん！何笑ってんのよ！アンタも食べるのよ」

「嫌よ。私、前に食べられなかったんだから」

「つていうか……………自分の剣でズバズバ人だのなんだの切り落としてきた人が今更何を言うかね？」

「だから余計に『生』は無理なのよ。人間を思い出す」

「あ、それ超マナー違反！食べる前に食欲を削ぐような事を言わないの」

「……………じゃあ外で待ってるから」

「大人な対応なのに大人げなく見えるのは何故だろうか？」

「あのね！三十やそこらで本当の大人になれると思ってるわけ？第一私はそんなモノになりたくないわ！三十でも四十でも棺桶に片足突っ込んでも私は大人にはなりません！生食反対！」

喚き散らしながらアリアは外に逃げていった。実は捌いている段階からもう嫌だったようで……………シゼルは情けなさそうに目を伏せながら王子に非礼を詫びて退席した。

結局この四人で食事をすることになる。皿が運ばれてどうぞ、とゾラに勧められた。

「いただきます」

リーデルと二人、ニコニコでその肉を口に運ぶ。塩漬けと違い臭みは殆ど無く、サシの入った肉は口の中で油が溶け出すように殆ど噛まずに消えて無くなった。肉の素材の甘みってものを初めて味わう。つるつと入っていつてしまうからお肉なのにくどくなくて、どどん食べられちゃうし……。

(こ、これは………ダイエットの敵……)

止まらない。止められない。生きてて良かったあ……。

とひたすら無言で食っているとそれをまるで家畜に餌でもやってるようにニコニコ微笑んで見ている王子が目に入った。

「なんですか？」

「いや？美味しそうに食べるなあって」

「美味しいですもん」

「次の料理は僕からだよ」

そう言ってカインは女官達に合図した。綺麗な器に装われる不釣り合いの茶色の汁。二人はそれを見下ろして固まった。リーデルは少し考えてから「アリアさん達を見てこよう」と立ち上がろうとした。今度は自分が止める番だ。

「手を離せ！どうしても無理な物だってあるんだ!!」

「リーデル！今外に出るのはダメです。アリちゃんの邪魔は良いけどシゼルさんの邪魔はいけません!」

「はあ？」

「人の恋路を邪魔したら馬に蹴られますよ」

真顔で言ったらリーデルは納得しかねるといった表情ではあったが渋々席に着いた。

「だって………これ根っこ」

「リーデル！根っこをナメルなっ！根っこは意外に味が美味しく浸みるし根っこ特有の出汁も出るんだぞ!」



「これだから庶民育ちは……………」

「わかってないわね……本当に美味しい物はゲテモノの形をしてるのよ！まず召し上がってから文句を言いなさい！」

とリーデルに説教を垂れてるとカインがその汁を啜りながら「君もね」と冷静に突っ込んだ。

だってこの汁、知ったニオイがする。飲んだらきつと泣いてしまう。

カインはある程度察しているのにこれを出してきたのだ。プロポーズを断った報復なのだろうか？

茶色の…………魚の出汁がよく利いた汁を口付けた。塩と酒と何種類かの調味料でシンプルに味付けられたそれは列して高級な料理ではない。庶民の味だ。先ほど食べた肉の旨味に比べたらこんなものななんて事は無い大衆料理だ。

でも…………自分の舌はこちらを選ぶ。

ポロポロと溢れ出る涙が邪魔になってそれ以上汁を飲むことは出来なかった。もうこれを食べたのは十年以上前になる、自分の故郷の味。食の原点の味。食べたくても、なかなか手に入らない調味料を使うため、食べられなかったこの味。

懐かしき母親の愛情の味。

「どう…………して？」

「あなたの事を少し調べたからです。故郷にも帰らない約束をしてまで手に入れた自由は良いものですか？」

「あなたに関係在りません」

「ええ。その方が良い。君の事情は僕には関係ないので、僕は君と行くことにしました」

キョトンとリーデルと二人で首を捻った。何を言ってるのか、本当に理解が出来なくて。

取り合えず聞き返してみた。

「え？」

「旅に。僕も行きますから」

「ええっ！？ダメでしょう？」

「それはあなたが決める事じゃない。僕が決めることです」

押しの強い王子はニコニコともう一度微笑むと、汁を指さして言う。

「それ、何よりも美味しかったでしょ？色々無理してるのが分かったので、一緒に旅をしてあなたが幸せになれる方法を考えようと思います。その間、僕と恋愛しましょう」

「結婚はその後で考えて下さい。」ってごり押し。

引きつって固まっていたら話は勝手に良い方にまとめ上げられてしまったのだった。

その王子を自分は嫌いにはなれずに、ただ笑ってしまった。

グルメルポにはどう書けばよいか？高級食のシルカークはもちろん、この懐かしき味を表現する方法を必死に考えてこの旅は続くのだ。

## （後書き）

実はリーダーも、アリアも、カインも……出てくる人物全て私が書いた他の小説の主役級です。

アリアがまだ独身……ってこっちが驚いています。

続くのだ……で終わってますが続く予定は今のところ……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7194q/>

---

世界横暴美食漫遊記

2011年2月7日01時25分発行